高橋重輝宅

位置：新得町字新得基線113番地

高橋重輝は、明治39年（1897）山形県金山村から入植した父琢次に連れられこの地で育った。

草葺の掘建小屋の住宅が、幾度かの火災に見舞われた記憶のある重輝は、昭和25年(1950)長男重光が20歳となったのを機に、重光と相談し、町で一番頑丈な家を建てることにした。

重輝は、何年も保存してあったヤチダモ、カツラを使い、大工には宮大工の経験のある及川政助を棟梁に選び、切り込みに5人で2ヶ月を掛け、釘を1本も使用しない茅葺き屋根の和風住宅を6ヶ月で完成させた。

現在、茅葺き屋根は改修され、トタン屋根に覆われている。

重輝は、昭和44年（1969）に77歳で没したが、大正年代北新得墓地に植えたエゾヤマザクラは、町の名木に指定され、現在も多くの人々を楽しませている。

銘板　新得亜麻工場の由来

設置：平成7年(1995)3月　位置：新得町本通北6丁目

新得亜麻工場の由来

敷地	12町歩（12ヘクタール）	機械	正線ムーラン20台 粗線ムーラン 3台
建物	1,817 坪（5,996 平方メートル）	能力（生産）	正線 30 万听（1,125 トン） 粗線15万听（563トン）
従業員数	約 130 名	所要原料数量	亜麻茎250万听（9,375 トン）
初代工場長	加来彦太郎	所要耕作面積	714 町歩（714 ヘクタール）

北海道における亜麻耕作は、第一次大戦後の大正７年頃から増加傾向を示し、十勝でも各会社が競って工場を建設し、６ヶ所にも及んだ。新得には、北海道亜麻工業株式会社が大正９年１０月に新得工場を設立した。

昭和４年に帝国繊維株式会社と合併。昭和２５年１月の財閥解体により３会社に再び分割されたが新得工場はそのまま帝国繊維株式会社に所属。その後昭和３０年８月に中央繊維会社に転じた。

しかし、化学繊維の隆盛により３６年間にわたる操業を中止し昭和３１年８月に工場を閉鎖した。

住民の亜麻工場への愛惜と、本町産業振興の功績を偲び、ここにその由来を伝えんとするものである

平成７年３月　調査・撰文　新得町郷土研究会
新得町教育委員会

【注記】

新得町の字名地番改正の昭和46年(1971)1月、この工場跡地は本通北6丁目となり、町は北生団地として公営住宅を建設し町民に提供した。また、昭和58年(1983)4月には、新得モータースクールを誘致し、自動車運転の指導、育成がはかられている。

石柱　福山小学校

設置：平成20年(2008)11月　位置：新得町字新得西6線98番地

福山小学校跡

大正六年　四月一日　福山尋常小学校に昇格
昭和二十二年四月一日　福山小学校に改称
昭和二十四年十一月三日　字新得西六線九十一番地に移設
昭和四十一年三月二十八日　新得小学校に統合

明治四十一年六月一日　字新得西六線九十八番地に
新得尋常小学校隧道澤特別教授場として開校
大正三年五月十七日　突然の山火事により焼失
十二月二十五日　字新得西六線八十九番地に移設

平成二十年十一月建立
新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】
福山地区は、明治39年(1906)に山形県人梅本伊之助ら数戸が入植、翌年には24、5戸が入植、更に同41年(1908)には福島団体10数戸が入植した。
同41年6月1日に、通称トンネル沢特別教授場として開校された。

木柱　北新得墓地

設置：平成10年(1998)10月　位置：新得町字新得西1線73番地1

北新得墓地入口

旧根室本線の鉄道敷設工事の落合・新得間は、明治三十四年に始り、同四十年九月八日に完成、全線開通した。

この墓地内に鉄道工事殉職者の墓石あり

設置　平成十年十月　新得町郷土研究会

【注記】 旧根室本線の鉄道敷設工事に従事した土工労働者の多くは、「タコ」と呼ばれて酷使されていた。なかでも特に待遇のひどかった堀内組の親方掛田万次郎は、供養のためか北新得墓地に板谷徳松以下10名の名前を刻んだ墓石を建立している。
また、墓地敷地内のエゾヤマザクラは、町の名木に指定されている。

銘板　新得家畜市場と国有種雄馬種付所の由来

設置：平成11年(1999)12月　位置：新得町栄町123番地

新得家畜市場と国有種雄馬種付所の由来

北海道の開拓に馬を除いては語れない。ここ新得においては、明治三十二年、新得駅逓所に官馬七頭が配置され、明治三十五年に岩瀬豊吉が石狩より二頭を買入れ、新墾に当ったのが始りであった。

当時馬の増産は国の重要施策であり、大正五年には二千頭に達したものの評価が低く、馬匹の改良に迫られた。これにより、大正十二年に国有屈足種付所が、新得町字新得西一線五十番地に設置となり、同十五年にこの地に移転、家畜市場を併設して運営、昭和に入るや優良馬が多く生産されるようになった。

新得家畜市場は当時、芽室以西を管轄していて、春秋の競り日には、前日から天幕を張り泊り込む者、又、鉄道輸送の利便さから、全国各地の購買客が集まり、旅館や料理店、一般商店も好景気に沸き返っていた。

市場では威勢のよい競り師の声が響き渡る中で、時には馬政局購買官の「軍馬お買い上げ」の一声で決まっていた。夜は、柴内旅館などで華やかな宴をはり、係官の接待が繰り広げられていた。

昭和二十三年、関係法令が廃止となり、種付所は解散し家畜市場は農業協同組合に引継がれたが、馬産は年々衰退する中で酪農が盛んになり、牛の家畜品評会や総合家畜祭が毎年開催されてきた。

農家にとっては、馬産と酪農は最も関係が深く、この地は、新得町の経済を大きく振興させた因縁があるのである。

ここに往時を想起してその由来を記し、後世に伝えんとするものである。

平成十一年十二月

新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】　上佐幌の長岡直吉は「馬を飼うのは三つの必要があるからである。一つは、大地積を耕作するゆえ耕馬として必要。一つは、畜産収入のため繁殖牡馬として、一つは自給肥料堆きゅう肥製造のためである。」と書き残している。戦時中には農耕馬までが、軍馬として徴用されていった。

馬が衰退したあとは、酪農が盛んになり、家畜祭（家畜共進会）が毎年盛大に行われたが、これも時の流れで趣を変え、平成元年(1989)で幕を閉じた。

銘板　北海道拓殖鉄道の由来

設置：平成12年(2000)12月　位置：新得町拓鉄

北海道拓殖鉄道の由来

十勝平野北部地域の開発と、産業を発展させ開拓民の定住促進をはかるためには、鉄道の敷設が不可欠と、新得の菊田豊之助が発起人総代となり北海道拓殖鉄道株式会社をこの地に設立した。

鉄道計画は、国鉄新得駅を起点に屈足、鹿追、士幌、上士幌を経由し、終点を国鉄池北線足寄駅に接続させるもので、趣意書をもって北海道長官をはじめ、各界有名人の賛成署名を得、大正十年（一九二一）六月、地方鉄道敷設を出願、翌々年鉄道大臣の認可となった。

大正十四年（一九二五）十一月、第一期工事として新得―鹿追間に敷設に着手、昭和三年（一九二八）十二月十五日、鹿追までの営業運転が開始され、ＳＬの汽笛が力強く鳴り渡り、住民は歓びと感激に浸った。

敷設工事は更に進み、中音更、そして昭和六年（一九三一）十一月上士幌まで延伸、順次営業運転がなされてきたが、もとより人口の希薄な地域であり、農産物や木材の輸送が主体のため、開業当初から多額の補助金をうけながらの赤字経営であった。

昭和二十一年（一九四六）、中木伊三郎が社長に就任、戦後の混乱期の中で国内経済の将来を見通し、かつ、会社健全経営の見地から、路線の縮小、他事業への進出で経営の補完をはかる一方、輸送量の増加が期待できない路線の廃止など、渾身の力を注いだ。

昭和三十六年（一九六一）十月、中木平三郎が社長に就任、この頃より、輸送の近代化が台頭、トラックとマイカーの急激な伸びは、輸送需要に大きく影響、加えて路線、諸施設の老朽化、二度に亘る台風の被害、本社社屋の火災、旧国鉄の機構改革等の影響などが、経営の悪化を増幅し、多額の資金を要することや、輸送の安全確保の困難性を熟慮し、昭和四十三年（一九六八）七月、全線廃止に至ったのである。四十年間の歴史を閉じた鉄道事業は、拓鉄の愛称で新得町の地域産業の一翼を担い地域の発展に大きく貢献してきたことを忘れてはならない。旧本社地は、拓鉄鉄道の歴史とともに新得町民の憩いの場として永く後世に利用されたい主旨で、平成六年十月に北海道拓殖鉄道株式会社より寄贈され、拓鉄公園として整備されたものである。

平成十二年（二〇〇〇）十二月

新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】

寄贈を受けた45,447平方㍍の土地は、全町公園化構想のもとに整備が行われ、木道、遊歩道、東屋、駐車場、トイレなどを設け、さらに池二面、樹種も多く、水生生物、鳥類も見られ、町民の憩いの場所のみならず、児童の観察学習などに非常に効果をもたらしている。

木柱　佐幌川流送跡地

設置：平成6年(1994)12月　位置：新得町1条北2丁目

佐幌川流送跡地

流送がなされていた時期
自　明治末期
至　大正十三年頃

由来
新内奥地で伐採された木材を
佐幌川に流し、この場所に集積された。

新得町郷土研究会
平成六年十二月設置

【注記】

佐幌岳の山麓から松丸太を佐幌川を流送し、これをこの周辺で市街側に揚げ、バチ（馬そり）で太田木工場へ運んでいた。小学校の踏切の坂を馬が登れず、苦しんでいる姿がよく見られた。

また北4丁目にも水力を活用した、菊田という木工場があった。

木柱　佐幌川水力発電所取水口跡

設置：平成8年(1996)10月　位置：新得町字下佐幌西5線121番地

佐幌川水力発電所取水口跡

この発電所は、人舞村（現清水町）十七号道路下の
佐幌川崖ふちに建設され、この地点から導水された。

発電開始　大正八年十二月二十四日

新得にも初めて電気が供給されたが、
昭和七年八月落雷により壊滅した。
新得町郷土研究会
平成八年十月設置

【注記】

この発電所は、清水町下佐幌17号道路下、佐幌川左岸ふちに設けられ、300キロワットの発電を行っていた。この水を本町字新得基線1号の対岸（南新得牧場）付近の佐幌川から導水していたため、本町は早くに電気の恩恵に浴した。

石柱　上佐幌原野開拓発祥之地

設置：昭和63年(1988)10月　位置：新得町字上佐幌基線25番地

上佐幌原野開拓発祥之地

この上佐幌地区は、明治三十三年福井県人徳橋清助ら数戸が入植した。明治末期の入植者は一四〇戸を数えた。
由来

位置　新得町字上佐幌基線二十番地附近

設置　昭和六十三年十月十五日
新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】

佐幌川の東方に連なる佐幌高台の開拓は、明治33年(1900)、福井県人の徳橋清助、斉藤友吉ほか数名の同志が、3号付近に開拓の根をおろしたことから始められた。また、この年の秋には、香川県から岩瀬豊吉、後藤栄吉らが入地し、これ以降、年毎に入植者は増え、佐幌高台の開拓は広まった。

現在、石柱は旧佐幌保育所敷地内に移設されている。

銘板　新四国八十八ヶ所の由来

設置：昭和62年(1987)10月　位置：新得神社社務所東側霊場入口

脇タネ　刀自・四国讃岐の人、大正六年から昭和三十一年まで、新得町番外地（現元町）に居住し、通称「酒屋の婆さん」の呼び名で多数の人々に親しまれ愛されていた。

特技として行なうお灸治療は、お大師さまへの信仰に満ちた施療であり、特に生活困難の人々には温情味溢れるとりなしであった。

名声を傳え聞き近郷はもとより、稚内・北見釧路及び道南の函館等遠方からも患者は尋ねて来た。

ある夜、タネさんは夢枕に弘法大師のお姿を感得し永年の念願であった「新四国新得八十八ヶ所の建立を発願し、私財を投じ宮脇数市・北久松外十五名と相図り、昭和六年多くの信仰厚い人々による協賛協力を得て、石仏九十体をお山に安置して、四国八十八ヶ所より分霊を受けると共に、その他の郷砂を納めて基盤となし、昭和六年八月四日開山した。

毎年四月二十一日は『お山開きの日』として十勝はもとより全道各地からの善男善女が参詣して賑わいを呈し盛大に執り行なわれている。

今では石仏二百体を超え、北海道では名高い霊場として、大衆信仰の場として敬慕され今後も連綿として継承されて行くであろう。

昭和六十二年十月
新得町郷土研究会

【補足】

十勝には、十勝川温泉、清水剣山・北清水、幕別、池田、浦幌、本別、足寄に八十八ヶ所があるが、これは、四国からの移住者や真言宗信仰者が多いからと推測できる。新得の八十八ヶ所は、中心となる地域の世話人の高齢化により、平成22年(2010)から山開き、本祭が休止となっている。

銘板　新得駅逓所の由来

設置：平成5年(1993)9月　位置：新得町字新得西10線（石狩道路）と8号道路合流点

新得駅逓所の由来

駅逓所は、明治三十三年、駅逓所が規定され、開拓移住民や一般旅行者の交通に便利な設置をすすめるよう要所に駅逓所の人達が勝川を遡行するようにあったが、負子供の手を引かなければならない困難を極めて目的地に到達したのである。

旭川から新得駅逓所は、明治三十一年十月帯広から三十八年八月、当初パンケシントク人馬車通ずる石狩道路の開削に伴って、明治立所として国費をもって設置され、その後新得駅逓所として改称、官馬七頭・馬車一台・建物は平方メートル百十二畳一室旦那用・八畳お茶室を備え、鎌谷与七が取扱人となる。

石狩道路沿いのこの場所が選ばれた。

当時の駅逓所は、帯広ー清水ー新得ー石狩串内であり、人馬の往来は一日平均七～八名、多い時には三十余名にのぼったという。

駅逓所間距離
新得ー清水　八、八四粁（二里九町）
清水ー帯広　三九、六粁（一〇里三町）
新得ー串内　九、九六粁（二里一九町二十間）

新得町建立

明治四十年九月八日・旧狩勝線の開通により駅逓所の任務を終え、翌年三月、八年余の経営は廃止された。

平成五年九月（資料調査　新得郷土研究会）

【注記】

取扱人の鎌谷与七は、富山県小勢村出身で、北海道集治監十勝分監の看守をしていたが、同郷の宮崎濁卑の紹介で取扱人になったといわれている。

銘板　石柱　石碑　悲願桜由緒の地

設置：昭和60年(1985)3月　位置：新得町字新得西1線35番地

悲願桜由緒の地

明治三十五年（一九〇二）、宮城県遠田郡涌谷町から日高山脈の山懐、新得原野の当地に入地した一人の開拓者がいた。悲願桜の基となった伊藤傳五郎さんである。明治四十年（一九〇七）に鉄道が走り新得停車場ができると、いつしか蒸気機関車の炭水夫として働くようになった。大正五年（一九一六）、傳五郎さん四十二歳、妻ナツヨさん三十一歳との間には、三男三女の子どもたちがあり幸せに暮らしていた。

その年の十一月二十八日午前二時三十分、夜警中の新得巡査駐在所の大山巡査が、当直のために不在であった傳五郎宅に、火元を発見して駆けつけたが、時すでに遅く妻子七人は家屋、馬とともに焼死してしまった。

絶望のどん底に落ちた傳五郎さんは、炭水夫を辞めた。やがて斉藤ゑなさんと再婚、鋳掛（いかけ）屋を始めたが、あるとき郷里の涌谷神社が桜の名所であることを思い起こし、妻子七人の供養の思いを込めて新得神社と新得寺に桜の木を植え始めた。

大正八年（一九一九）には神社移転確定を記念して、桜の苗木二百三十本を新得神社に寄贈するなど、昭和二年、三年頃まで心を込めて桜の植樹を続けた。花が咲くのを楽しみにしていたが、満山の花を見ることなく昭和九年（一九三四）永遠の眠りについた。

傳五郎さんの美しい心と汗の結晶は、今では三千本を数えるに至り、十勝有数の桜の名所として毎年桜まつりが催されるなど、人々の憩いの場となっている。

この桜を多くの人は「悲願桜」と呼んでいる。ここより東へ二百七十メートルの標柱が妻子七人の罹災の地である。

妻　ナツヨ　三十一歳
三男　傳治　十一歳
駒代　二七歳
三女　フユノ　四歳
二男　駒治　十四歳
長女　千代乃　九歳
富治　四歳

昭和六十年三月建立
新得町（資料調査・新得町郷土研究会）

【注記】

新得神社山の桜は、毎年5月中旬頃満開となり、町内外に知れ渡っているが、その桜の基礎をつくった伊藤傳五郎の碑が神社境内に、また由来板が西1線の道路沿いに、その東方の270mの畑地には住居跡の石柱が建立されている。

石碑　新得町発祥之地碑 及び 開拓者をたたえる碑 開拓100周年記念レリーフ

設置：平成11年(1999)9月　位置：新得町字新得西1線9番地（南新得）

本町開拓の先鞭をつけた村の山は、山形県北村山郡高畠村（初代関山戸長）

大字関名山（現在の東根市）出身の村山和十郎（初代関山戸長）

大正十四年当時北海道開拓者である。

ら海の治で十九年目に公布され、分処が行われた。北海道土地払下規則に則って、海道土地明治三十四年四月に新天地を求めて移り住む十名の同士を集団移住をこ探しを決意し、北海道十勝川流域に沿って開拓を出発、三名のアイヌ人案内パンケシントクに到着した。

両原野に鬱蒼とした巨木との身丈を超す昼なお暗い原始の森に沿って遡りを目的地とする。

国有未開地貸付申請を行った。

翌年八月二十日付で北海道庁指令第三九号明治三十二年三月九日、開墾に着手した。

開墾小屋を建て、自然と難苦を克服しながら、測量を行い、開墾の鍬が入れられ、佐幌川西方に沿ってなだらかな原野は、一面に足を踏み入れる者の少なかった。

開墾の苦闘は、この偉業に感謝するとともに、新得町民の新得町発祥の地の開拓者を表わすものである。

私たちは、過去の開拓先駆者の苦闘を受け継ぎ、この偉業に感謝し、百周年を迎え、新得町開拓者を末永くたたえる碑」を建立するものである。

開拓先駆者名

村山和十郎　村形三吉　後藤藤次郎　柴田久作　佐藤房吉　高橋元治　岡田長蔵

高橋菊次郎　原田熊五郎　早坂政蔵　岡田吉蔵　清野勢太郎　椎名鶴五郎　石山善六

平成十一年九月七日建立　新得町

【注記】

昭和29年(1954)9月、新得町開基50周年を記念して「新得町発祥之地碑」が建立され、その記念碑には「長々とどこまでも広く、鹿の群れがそこかしこに遊ぶ未開の原野を見下ろして、先人は燃えたのだった。この地を耕し、青々と天に向かって伸びる作物でうめつくそう。幸福な人々の住む理想のふるさとを築こう。」と記されている。

石柱　広内国民学校

設置：平成19年(2007)10月　位置：新得町字新得西6線84番地

廣内國民學校跡

昭和十六年四月一日　廣内國民學校に改称
昭和十九年二月七日　新得國民學校に統合

大正五年二月　十四日　字新得西六線八十四番地に
新得尋常高等小学校所属廣内特別教授場として開校
大正九年八月二十一日　廣内尋常小學校に昇格

平成十九年十月建立　新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】

広内地区には、明治末期から大正初期に東北各県から入植があり、大正8年(1919)頃には開拓者50戸を数えている。同5年(1916)2月に広内特別教授場として開校され、同6年頃には児童数35名が在籍している。

跡地には桜の古木が残っており、毎年見事に花を咲かせ、当時をしのばせている。

銘板　道立総合研究機構畜産試験場の軟石サイロ

設置：昭和62年(1987)3月　位置：新得町字新得西4線40番地

軟石サイロの由来

このサイロは、当場の前進である真駒内種畜場内穴牛の舎付属山イロは、内和六年の畜産試験場が建設されたのが昭和二十年軟石を用いて、真駒内種畜場の施設として接収された際、真駒内種畜場の施設として昭和二十年三月、新得町の現在地に種畜場の移転整備が決定し、昭和二十二年三月、当時の物資不足につい十年近くの歳月を要し、移転解体撤去を命ぜられた。

多くの施設とともに解体撤去されたこれらの十数棟の切り出された石材は、当時の軟石サイロと同様に、牛舎のサイロとして再利用されたことが、この軟石サイロの由来である。

移転のサイロは、昭和六十二年三月、試験牛舎が不用になり解体撤去されたものである。

当場の歴史を刻む唯一の施設であるため、ここに記念建物として保存展示したものである。

サイロの高さ　地上高　一五メートル
サイロの直径　内径　五・五メートル
サイロの容積　約　二八一立方メートル
使われている軟石　七三〇　個

北海道立新得畜産試験場
昭和六十二年三月

【注記】

平成12年(2000)に滝川市の施設を統合し、北海道立畜産試験場となり、新しい体制で試験研究が開始され、同時にこれまでの建造物は全て改築された。しかし、この軟石サイロは由来板を設置し、当時の歴史を刻む唯一の施設として保存され、またヨーロッパスタイルの旧庁舎は、資料館として保存されている。場内には、北海道の酪農の父とされるエドウィンダン像、創始百年記念碑などが建っている。

石碑　ＪＲ新狩勝トンネル

設置：昭和40年(1965)3月　位置：新得町字新得西9線90番地付近

旧国鉄根室本線は、旧狩勝線の区間が急勾配と急曲線のため、鉄道輸送において大きな障害になっており、狩勝トンネルも老朽化して、日々発展しつつある現代社会に対応できなくなっていた。さらに道央圏には富良野、滝川を経由するため、時間的なロスがあった。

このような問題を解消し、輸送力の増強とサービスの向上をはかり、航空輸送にも結合させるため、千歳線、追分線、紅葉山線、狩勝線を結び、道央へ連絡する構想で、昭和37年(1962)4月に石勝線が着工。19年の歳月を費やして、昭和56年(1981)10月1日営業運転に漕ぎつけた。

このトンネルは、全長5,648mで、上りの出口は分かれて落合に通じており、最新の技術が採用され、高速と輸送力増強が図られ、安全で快適なサービスを提供している。

新狩勝トンネルは、標高449m、旧狩勝トンネルは、534mである。

記念碑には、「新狩勝隧道　昭和40年3月　運輸大臣松浦周太郎」と刻まれている。

石柱　新得小学校開校の地

設置：昭和62年(1987)11月　位置：新得町西1条北2丁目

新得小学校開校の地

明治三十五年十月四日

新得における公立学校　昭和六十二年十一月五日
による教育の始め
新得町教育委員会
新得町郷土研究会

【注記】明治34年(1901)には新得地域も69戸となり、学令児童の教育施設の必要に迫られていた。

当時、組長であった橘井重助ら3名は、芽室外六ヵ村戸長役場に学校建設を要望し、自ら建築委員となり、部落民各戸に1円と茅締板3枚を出し合い着工にかかった。しかし、工事半ばで資金不足となり、狩勝隧道工事請負人から金百円の篤志寄付を受けて、堀っ立て草葺24坪(79.2平方㍍)の校舎が竣工し、公立新得簡易教育所(義務教育4年制)として、明治35年(1902)10月4日に創設されたのが新得小学校の始まりである。

平成14年(2002)9月22日には、開校100周年を迎へ盛大に記念式典が挙行された。

石碑　藤川マキエ記念碑

設置：昭和61年(1986)9月　位置：新得町西3条北1丁目

由来

従六位勲五等瑞宝章　新得町名誉町民

藤川マキエ女史は、明治三十一年十一月香川県で出生、大正八年樺太（サハリン）に渡り、豊原市に藤川実践女学校を創設し校長として多くの婦女子の教育に尽力され、昭和二十二年北海道喜茂別に引き上げ農村婦女子のため裁縫教習所を開設。のちに滝川市女子高等学校新十津川分校に奉職し後年を御影のろうあ児施設に勤め、昭和二十八年田中皎一氏と共に新得町のこの地に移り地域社会の協力を受け身障授産施設わかふじ寮を創設し、その功績により昭和三十五年四月厚生大臣表彰を受けた。以来社会福祉法人厚生協会の理事長となり厚生援護に献身され、又昭和五十六年全国に魁けて聴覚障害者人ホームやすらぎ荘を開設し、福祉施設の基盤を礎き、ろうあ者の慈母と仰がれ親しまれつゝ昭和六十年一月十三日八十八才をもち、生涯を閉じる

ここに多くの功績を讃え、同志の浄財によりこの記念碑を建立する。

昭和六十一年九月二十三日建立

【注記】

新得町が「福祉の町」といわれる由縁には、昭和28年(1953)藤川マキエ氏が提唱の「ろうあ者を主体とした授産施設」の創設にあるが、これには田村政男氏の土地、建物の提供や田中皎一氏ら有志の人々の協力があった。昭和54年(1979)の開基80周年記念式典では、ろうあ者の更生に尽力された功績を讃え、藤川氏に名誉町民の称号が贈られた。

建物　国鉄新得機関区跡地

位置：新得町西1条北1丁目

新得機関庫は、大正6年(1917)4月16日に設置されているが、この機関車庫は、落合に設置されていた機関庫が移転されたものである。新得への移転は、狩勝峠という旧根室本線最大の難所に対応するためのもので、道東随一の偉容を誇る機関庫といわれた。

この機関庫は、アメリカ式扇形で10輌を格納でき、面積664坪木骨煉瓦造りで、床は軌条が敷かれ、その下は溝状で、側面は木骨煉瓦張りとなっていた。腰壁の笠石敷石等は、石切山産花崗岩が大量に使用されていた。

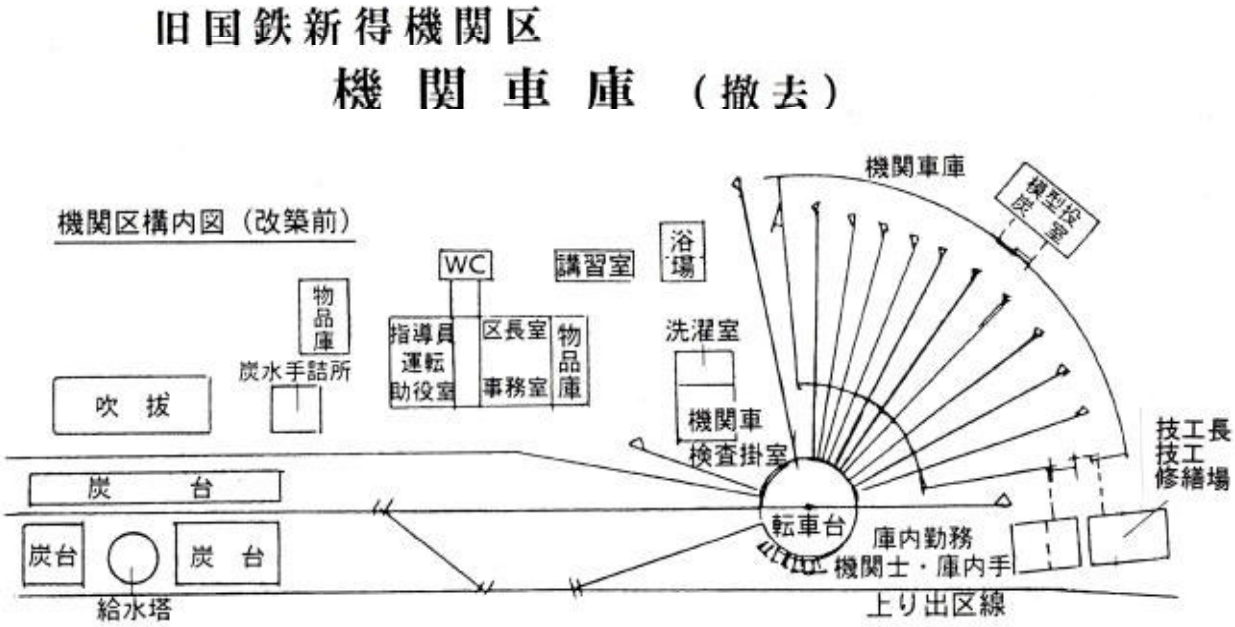
屋根は、コールタール重ね塗りで、厚さ60センチメートルもあった。

機関庫での業務は、機関車の点検整備、給炭、給水等で、狩勝峠の運行は、機関車二両連結のため、重労働の連続であったといわれている。

昭和28年(1953)に機関区庁舎及び車庫が改築され、同時に石炭台が増築されている。

昭和41年(1966)10月に、新狩勝トンネルの開通でジーゼル化され、動力車の基地が釧路機関区に統合されたため、機関車及び職員57名が住み馴れたこの地から転勤で去り、さらに合理化され広域配置転換や帯広運転区への統合、分割民営化などにより、平成4年(1992)7月をもって全面的に廃止になり、町のシンボルだった機関区は75年の歴史を閉じた。

機関区は、平成6年(1994)8月に解体された。



新 得 神 社

位置：新得町西1条北3丁目11番地

明治32年(1899)に新得に入植した開拓者が、明治36年(1903)、現在の新得小学校の一角に標柱を建立し、天照皇大神を祀り、新得神社として祭祀をしたのが初めとされる。

大正5年（1916）に新得山山頂（現在の元宮）に社殿を造営し奉遷するが、細い山道を進んでの参拝は困難であったため、大正8年（1919）参道に二基の鳥居を設け、現在の場所に社殿を造営して奉遷した。

昭和3年(1928)神社設立の認可が下り、森本市太郎が初代社掌として補せられた。

翌年、村社の社格が与えられ、昭和13年(1938)には、郷社に昇格した。

昭和15年（1940）、紀元二千六百年奉祝事業として社殿の増改築が計画され、戦時下の物資不足のなか、町民の勤労奉仕などにより、昭和17年(1942)に現在の社殿が竣工した。

その後幾度となく修理、改修が行われるなど、御鎮座以来、新得の住民の心の支えとして、大切に祀られている。

御祭神は、天照皇大神。春の大祭は、6月15日。

秋の例祭は、9月15日に行われている。

銘板　佐幌小学校

設置：平成19年(2007)年3月　位置：新得町字上佐幌基線25

時をこえて

明治三十九年簡易教習所として開設された佐幌小学校は、幾多の変遷を経て地域と不離一体の関わりを共有しながら、教育文化の要として実に千余名の子弟を世に送り出しました。

過酷な開拓の日々にもかかわらず、先人の教育に対する情熱は怯むことなく次代へと受け継がれてきました。

しかし、時を経て農家戸数の減少、少子化が進行し、平成十九年をもって閉校のやむなきに至りました。

一世紀にわたり教育の現場に尽力された教職員の方々に敬意を表し、地域の皆様のご支援に感謝いたします。

佐幌小学校とともに歩んだ皆様と同窓生の更なる飛躍を祈念します。

平成十九年三月三十一日

佐幌小学校開校百年記念・閉校協賛会

【注記】明治39年(1906)7月5日開校。平成19年(2007)3月31日閉校。

閉校記念プレートは、80周年で設置された「希望の郷」碑、横に建立されている。

文は、大江昭三氏。また、プレートには、小笠原知新氏の詩「閉校をともにし桜今老いて百歳(ももとせ)諸々主とはなりぬ」が刻まれている。

銘板　上佐幌小学校

設置：平成16年(2004)3月　位置：新得町字上佐幌基線86番地

永久しえに

上佐幌小学校は、昼なお暗き柏林でおおわれた原野を一鍬一鍬切り拓いた先人が、「上佐幌の発展は教育にある」と言う思いから明治四十一年（一九〇八）十一月二十四日に基線七十三番地に草葺き茅囲いで掘っ立ての校舎を建設して始まった。

その後、数度の改築や移転、名称の変更を経て昭和二十二年（一九四七）の新学制の発足に伴い、現在の上佐幌小学校になった。昭和三十三年（一九五八）には児童数一三七名、戸数一九二戸を数え、中学校の併置も話題になるほどであった。平成十五年（二〇〇三）で九十五年の歴史を刻み、学び舎から九〇〇名の有為な人材を世に送り出した。

しかし、大型機械の導入による農業人口の減少や全国的な少子化の流れはここ上佐幌地域にも押し寄せ、これからの児童数は減少の一途をたどる状況になってきた。そこで、上佐幌小学校の将来についてＰＴＡや地域全体で話し合いを重ねた結果、「地域に学校が無くなることは寂しいが、子どもの教育のためには閉校もやむ得ない」という苦渋の選択をするに至り、平成十五年度をもって閉校することとなった。

この学校で学んだ九〇四名の一人一人は、母校「上佐幌小学校」を心の故郷として永久しえに、脈々と生き続けていくことでありましょう。

平成十六年三月三十一日
上佐幌小学校閉校記念事業協賛会

【注記】

明治41年(1908)11月24日開校。平成16年(2004)3月31日閉校。

閉校までの歴史を刻んだプレート「永久しえに」は、後世に向け学校が地域にあった証として校門に設置されている。

上佐幌八幡神社

位置：新得町字上佐幌基線84

上佐幌に開拓入植した湯浅伝吉らの呼びかけにより、和賀多郎兵衛、植田鉄三郎、加藤半兵衛の3人が、明治41年（1908）神社敷地を寄贈し、上佐幌基線94に創立し、9月に祠を祀ったのが始まりである。

大正9年(1920)に同基線96に移転。同時に函館八幡宮から御祭神が分祀された。

馬頭観世音は、昭和54年(1979)、同神社敷地に移設された。

昭和21年(1946)に御真影を本殿とし、9月15日を祭礼日と改めた。

拝殿前の一対の狛犬は、同36年(1961)吉本寛三郎が、新内石切山の石材を自ら刻み、奉納したものである。

同57年(1982)木造の鳥居を鋼材に改めて建立したが、神社の改築等の費用は、上佐幌の住民の寄附金で賄われてきたものである。

平成20年(2008)、開拓100年を迎えた記念事業として、上佐幌八幡神社と馬頭観世音が、住民の手によって上佐幌基線84に移設された。